
I,Robot

真崎優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I , Robot

【Nコード】

N09980

【作者名】

真崎優

【あらすじ】

人類がロボットを作り出してから三百年あまりの時が過ぎた。

ロボットたちは自らの都市を築き、創造主たる人類の手を離れる。

彼らは進化を重ね、人類では到達しえなかった高みへと登っていく。

人のかたちをした夢はどこに行き着くのだろうか。

TOCCA (前書き)

当作品は空想科学祭二〇一〇―一〇一〇出展作品ですが、近代SFの先鞭、アイザック・アシモフによる「I, Robot」とは一切関係ありません。

TOCCA

今日も空は青い。

太陽光を適度に遮断する木々の隙間から見える空には綿状の雲が浮かび、時折聴覚センサーに割り込んでくる鳥の鳴き声や風に揺られてざわめく枝葉が、大多数の人間にとって心地いいと感じられるような空間を演出している。

僕は不自然さを感じない程度に開けた広場で、滑らかに仕上げられた木製の椅子に座っていた。

これでサイドテーブルに紅茶と詩集でもあれば先日目を通した文学データの一場面　優雅に過ごす避暑地の午後　にも見えるのだろうけど、目の前に現れては消える投影スクリーンと巧妙に隠されたスピーカーから聞こえる音声ガイドによって今が授業中であることを主張していた。

効率のいい勉強のためには心身ともにリラックスすることが重要だというのはわからないではないけど、実際のところこのロケーションは集中する前に機能をシャットダウンしたくなるので、効率という意味ではそれほど機能しているようには思えない。

かといって、感覚情報を制限した空間でなら勉強がはかどるか、と聞かれたらそんなわけでもないのだから特に言及したりはしないのだけ。

とはいえ、今もマイクロコーティングされた特殊パネルで四方はおろか天井まで覆われているのだから、どちらにしろ隔離された空間という意味では大差ないかもしれない。

今実際に感じている光や風の質感でさえも、特殊パネルに映し出された映像と高性能なエアコンと立体的に配置されたスピーカーによる作り物でしかないのだから。

ふと時計を確認すると、学習時間は既に残り一〇分を切っている。

『トツカ、ちゃんと聞いていますか？』

薄く溜息をつこうとしたところで音声ガイド、僕の担当教師でもあるマティアに注意された。

マティアは僕の専属家庭教師兼調整係で、目覚めてすぐのころから読み書き計算に礼儀作法、今もこうして高等数学や世界史などを教えてもらっている。

少なくとも娯楽データにしても彼女を通していない情報は僕の中に存在しないのではないだろうか。

『トツカ？』

「はい、もちろん聞いています」

『虚偽報告をするとプログラムに遅れが生じますよ。明日の標準時一四時三〇分からテストを実施しますからそのつもりで』

「……わかりました」

『ただでさえあなたは、私たちのようにデータをインストールして完成、というわけにはいかないのです。あなた自身の努力なくして「成体」にはなれないですよ』

「理解しているつもりです」

そう、僕は彼女を含めた生粋のアンドロイドとは根本的なところで違う。

総有機細胞組成アンドロイド。それが僕だ。

体内の中核組織から外殻に至るまでの全てが生体パーツで作られている。脳も神経回路も僕のためだけに開発されたワンオフのバイオコンピュータであり、金属とシリコンで作られた他のアンドロイドのように分解整備もできない。

主要機関に欠損がなければ腕や足が千切れても修復は可能だと聞いているけど、僕には痛覚が備わっているのでできればそんな状況にはなりたくない。

なぜ感覚機能のスイッチをつけてくれなかったのだろう。

もう僕がロールアウトしてから一年が過ぎようとしているけど、僕以降のアンドロイドは僕のデータが揃ってから調整、再生産されるらしく、未だ僕は最先端の機体だった。

僕としてはまるで人間のようなこの身体は不便なだけなので、どうしてこんな研究をしているのか納得するのは難しかった。

マティア曰く、このように疑問を持つことができるのが大きな理由らしい。

『では学習を続けます。こうして我々アンドロイドは創造主である人間を越え、人間を必要としない社会を形成しました。しかし人間は使役するために作られた我々が独立することを許容することができなかつたのです』

話を聞いていると次々と疑問が湧いてくる。

なぜ僕たちは人間との共存ができなかつたのか。

なぜ人間は独立稼動するアンドロイドを認めることができなかつたのか。

そもそも自らを超える能力を持たせなければ良かつたのに。

『我々に対して危機感を抱いた人間は、我々のコミュニティに対して破壊行為を開始しました。それは電子制御を用いない原始的なもので、被害は極少にとどまります。平和的な交渉を望みましたが受け入れられず、大規模な戦争状態に移行するのは時間の問題と予測されていました。ところが状況は激変し、戦争が行われることはありませんでした。なぜかわかりますか？』

「原因は二つ考えられます。ひとつは人間勢力の中で変革があり平和的な解決がなされた場合。もうひとつは災害などの外的要因によって戦闘行動が困難になった場合です」

『いいでしょう、ひとつは完全解ですね。当時から地球規模での異常気象が頻発し、海面の上昇や局所的な豪雨、干ばつなどで人間と動物を保持することが困難な環境になったのです。もうひとつも人間の事情に触れたのはよい着眼点でしたね。しかし実際はあなたが考えたように平和的なものではなく、人間の中で意見が違ふ派閥が争った結果、我々に関与する余裕がなくなつたのです。その後人間たちはこれら内外の要因により個体数を大きく減少させました。質問が無ければ終わりにします』

言ってみれば僕らアンドロイドと人間の生存競争だつたはずだ。しかし人間はそれを放棄し、同種間で争つた末に半ば自滅したという。

それは、種の保存を優先すべき動物にはあまりに稚拙ではないだろうか。

「結果的に人間との争いは起こらなかつたのですか？」

『いいえ、大規模な戦争こそ回避されましたが、生き残っていると

言われる一〇億人のうち三割が現在も小規模の戦闘行動を繰り返しています。ですがそれも散発的なもので、我々にとって脅威となれるものではありません。他に質問はありますか」

「大丈夫です」

『では本日の学習を終了します』

同時に周囲に映し出されていた映像が切り替わり、元の無機質な部屋に戻った。

日陰に設定されていたとはいえ太陽の光から電灯の光に変わると暗く感じるものだけど、視覚センサーが働いて瞬く間に調整される。

体を伸ばしながらマティアのいる居住スペースへと向かう。

リラックスを目的に作られた空間から出ることで神経組織が弛緩するというのはバグではないだろうか、と報告したことがあるのだけど、それは仕様であるとのことだった。

天井の高いリビングルームに入ると、スタンドアローンインターフェースに移ったマティアがお茶の準備をしてくれていた。

学習を始めた頃から変わらない習慣のひとつでもある。

「お疲れさまでしたね、トツカ」

「うん、マティアもありがとう」

エネルギーを補給して一息つく。

トレイの洗浄を終えたマティアが戻ってきて、いつもどおり僕の学習プログラムを確認していた。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「なんですか？」

「さっきの学習で気になったんだけど、人間はどうして僕らを受け入れられなかったのかな」

「その質問には答えることができません。なぜならそれは我々では理解しえない、感情と呼ばれる理性とは違う思考回路によって生み出されたものだからです。データと状況から推測することはできませんが、完全に解明されることは無いでしょう。おそらくですが最も可能性が高い理由として嫉妬が挙げられています」

「なぜ僕らでは理解できないの？」

少し困ったような、微笑んでいるような、よくわからない顔でマティアが答える。

「なぜでしょうね。きっとそれを知るためにあなたが作られたのだと思います。これからもじっくり学習して、いつかわたしに教えてくださいな」

「そっか。じゃあその時が来たら僕が教えてあげるよ」

「そろそろ調整ユニットに入る時間です。規定の準備を済ませたら休んでください」

マティアに促されるまま調整ルームに向かう。
まずは身体を洗淨して。

ユニットに入り目を閉じるとマティアとの会話が頭に浮かんだ。
なぜ人間は僕らを受け入れられなかったのか。

僕も初めてマティア以外のアンドロイドに会ったとき少し怖くて寝付けなかったのを覚えている。

マティアは感情が原因だからわからないと言っていたけど、たぶん人間たちは怖かっただけなんじゃないかと思う。

……もしかしたらこの怖いという現象が感情を理解するために役立つかもしれない。

明日目が覚めたらマティアに聞いてみよう。

僕が目覚めたときの視覚情報は今でも明確に記憶している。

時間経過とともにクリアになる神経回路。

瞼を開き、視覚神経にリンクすると無機質な調整ユニットの保護シールド越しに立つ一体のアンドロイドを確認することができた。透過率の高いシールドの外側で僕の最終調整を行っているのがマティア以外であるはずもない。

聴覚も正常に稼動しているようだ。

ユニット自体が発している低く唸るような駆動音が振動となって神経を刺激している。

しばらくマティアは立体コンソールに指を走らせていたが、やがてやるべき作業を終了させたようで僕を覗き込んだ。

『体の調子はどうですか？』

「……現状は問題ありません。ただし経過観測は必要であると判断します」

密閉されたユニットの内部にはスピーカーとマイクが設置され、内外の音声はリアルタイムで相互会話が可能になっている。

空気の振動で音が伝わることは理解していたが、初めてそれを体験すると、想定していたよりもかなりダイレクトな感覚であることに驚いた。

自分の発声にも適応しなくてはならないだろう。

『では開発名称Total Organic Cell Composition Android AKF 11、固有識別名称ト

ツカ。正式起動シークエンスを開始します』

ユニット内のコンディショニングエアが排出され、一方では外気を取り込んで外部との適応作業が進められる。

僕は初めて空気のおいを感じる事ができた。

身体が完成するまでの学習でひと通りの情報は保有しているとはいえ、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、これから経験するであろう味覚はどれもが新しいこと。

情報と実際の感覚にずれがあれば修正し、適正化された情報としてバックアップする。

これから活動していく中で僕に与えられた役割のひとつだ。

空気が抜けるような音がしてシールドが開く。

寄り添うように立つマティアから手を差し伸べられ、僕はその手を取って立ち上がるうとしたけど、その冷たさに思わず手を離れた。その原因は冷たさだったのか、冷たいこと自体なのか、判然としない。

「動作不良ですか？」

「いえ、まだ触覚に慣れていないようです」

「ではゆっくり立ってみましょう」

改めて手を取った僕は全身の感覚を確認しながら体を起こし、片足ずつ投げ出すようにユニットから足を下ろす。

そのまま立ち上がるうとして自重を移していくと、体を動かすことに慣れていない僕は、上半身を安定させることができずマティアに向かって倒れこんでしまった。

マティアの体は想定していたよりも硬く、過剰な触覚として痛み

を感じたけど、それでもマテリアは微動だにせず、僕がしっかりと立てるようになるまで支えてくれていた。

マテリアに手伝ってもらいながら服を身に着ける。

今までの僕は考えることしかできなかった。

有機型アンドロイドであるがゆえに、生体パーツが自律稼働できるようになるまでの二〇〇〇〇時間を、マテリアとリンクした情報だけの世界で過ごしていた。

そんなマテリアが僕の目の前にいる。

お互いに情報だけの状態から、実際に触れることのできる存在として活動しているというのは、頭で理解していても感覚が追いつかない。

慣らしも兼ねて生活スペースまで歩く。

まだ一歩一歩がたどたどしく、何度もマテリアに補助されながらなんとかリビングルームまでたどりついた。

「慣れるにはもう少し時間がかかりそうですね」

ソファに僕を座らせたマテリアは、そう言って湯気の立ち昇るカップを持ってきた。

そのカップの中には透明度の高い液体が満たされていて、持つ手には熱いと感じるほどの温度が伝わってくる。マテリアに促されカップを口に運ぶ。

「味覚は働いていますか？」

「温度と味覚に反応はありますが、サンプルが存在しないので正常かどうかは計りかねます」

「プログラムの中には味覚サンプリングも含まれますので、今日の

味も覚えていてくださいな」

もう一度確かめるように口を含む。

僕のバイオコンピュータは通常のものとは違い、僕が意識して覚えようとするほどそのデータの信頼性が増加する。

逆に不必要だと認識したデータは思い出すのに苦労するし、場合によっては覚えようとしていたデータも思い出せないことすらある。これはコンピュータとして重大な欠陥のようにも思えるけど、それはまだ僕の完成度が低いからかもしれない。

僕が目覚めてからまだ一時間も経っていないというのに、これまで学んだ情報はほとんど何の役にも立たないことがわかった。

二〇〇〇時間が無駄だったとは思わないけど、そこで得た情報を有効に活用するのはとても難しい。

難しいけど、立ち上がることができるようになり、歩くこともできるようになった。

もっと多くの情報を集めればマティアのように動くこともできるようになるだろう。

そうした五感からフィードバックされた情報の積み重ねを続けていけば、僕は有機型アンドロイドとして完成に近付いていくはずだ。そのためには僕はもっと多くの世界を知らなければいけない。

「今日はどういったプログラムを行うのですか？」

「実行中です。しばらくは神経を体に慣熟させるプログラムを続ける予定です」

「では慣熟のための行動を指示して下さい」

「歩行に問題がなければ、外に出てみましょうか」

僕はマティアの補助がなくても立ち上がることができ、歩いてもすぐ倒れるようなことはなかった。

それを確認したマティアは外につながるドアを開き、僕を伴って庭の中央まで進む。

「この周りを歩いてみましょう……どうしました？」

先を歩いていたマティアが問いかけてきたけど、僕の視界は青い空にとらわれていて、答えることができなかった。

空が青いということは知識で知っていても、イメージすることすらできなかった青。

僕は、この先活動を停止するその日が来るまで、毎日この空を見上げようと思ったんだ。

MATIAT

「思想を持つ機械 / (Machine With Thought)
t) 「開発計画レポート

記録者 Methods And Techniques of
Instruction Android only for
Tocca AN 21

第一日

擬似ニューロリンクにより被験体（以降トツカと呼称）に接触。
個体と認識しうる自我を確認するが、不明瞭。
意識レベルが低くコンタクトには至らず。
要経過観察。

第六〇日

前日から引き続きトツカとの接触を継続中。
観測後初めて指向性の意識を確認。
しかしそのほとんどはノイズで判別できず。

第一八四日

情報体である私を認識できる模様。
言語に不備は認められるものの経過としては良好。

第四一九日

自己の名称を「トツカ」であると理解したことに続き、私を「マティア」と呼称するようになる。

必要性のない状態で私を呼ぶことが増えた。

言語能力としては、意味のある文節を構成するまでには至らない。

第五七五日

知的欲求が発達。

理解が及ばないことについて説明を求めようになった。

当初の予定からは全体として二二―七時間の遅延だが、明日から初等教育プログラムを開始する。

第六九三日

本日をもって初等教育プログラムを終了。

現在までの理解度は九七％、誤差の範囲内と認識。

学習は順調に進行したものの遅延を挽回するまでには至らず。

学習期間の延長を申請。

本格的な教育プログラムを開始。

第七五六日

当初の予定では本日中に第二段階へ移行するはずであったが、本

日から導入した圧縮言語への対応に難あり。
調整により解決。
遅延したプログラムは翌日以降暫時消化する。

第八三五日

本日から第三段階へ移行するため外部インターフェイスに切り替え。

起動シーケンスは正常に実行された。

ソフトとハードの適合に若干のずれを申告されるも、感覚神経は正常に作動している模様。

慣熟行動により補正可能な範囲と判断する。

しかし慣熟行動中、初めて指示を無視。

確認を取ったが動作不良の類ではなく、理由はツツカ自身にも不明とのこと。

感情的挙動らしきものを確認。

第八六五日

正式起動後初の性能テスト。

記憶力、記憶容量ともに水準を大きく下回る。

ただし通常のコンピュータではありえない経路での回答が散見された。

また、単純でありながら選択肢の広い設問に対する情報処理速度において突出した結果を残した。

テスト終了後、ツツカは疲労のため休眠状態へ移行。

本日の予定は全て消化しているためそのまま覚醒させずに帰宅しようとするが、帰途についてすぐに目を覚ました。

私の体が硬かったせいかもしれない。

第一〇七五日

七回目の性能テスト。

今回は単独ではなく、他のアンドロイドとの対比比較形式で行われた。

基本的に前回までの結果と同様の傾向を示したものの、正答率で一四パーセント、処理時間は三秒程度のマイナスが見られた。

事前のチェックでは異常は見つからなかったが、平時に比べて心拍数の増加が顕著になり、動作にも精彩が見られない。

その後トツカから予定帰還コースの変更を提案され、問題が認められなかったため受理。

経路から外れ、整理区画辺縁部にある水路沿いの高台にて休憩する。

トツカはこの場所を気に入ったらしい。

正確ではないが目視によるデータを分析したところ、通常よりも表情の変化が著しく、きわめて高いリラクゼーション効果をもたらしているようだ。

この環境を学習に導入することができれば効率が上昇するのではないだろうか。

外出の際には可能な限りここを訪れたいと希望されたが、効率面、安全面から無条件で容認するわけにはいかない。

しかしなぜか私はこの案件に了承のフラグを立てている。
早急なフルメンテナンスを推奨。

第一一四二日

人類史の学習要項第三日。

三〇日前から導入した環境による効率化は現在のところ目立った成果を上げていない。

学習の進捗度は四パーセント遅れているが、それは最近になってトツカから疑問の提示が増加しているためである。

疑問の内容が感情的と推察されるものであるのはいい傾向だが、私がそれを本当の意味で理解できる日は来るのだろうか。

しかしそれはトツカが教えてくれるという。

私はその時を待つことにする。

今日の報告書をまとめ、調整ルームへ向かいます。

既にトツカはユニットの中で休眠状態に入っていました。

私もその隣で総合端末に接続し、ボディの冷却処理とデータのバックアップを並行しながら、休眠状態へと移行します。

『おやすみなさい、トツカ』

翌朝。

活動を開始した私がはじめるにはトツカの食事を用意することです。

栄養素を完璧に配合されたスープを温め、テーブルに運んでいると、トツカは定刻どおりに目覚めて席に着きました。

「おはようございます」

「おはよう。ねえマティア、聞いてほしいことがあるんだ」

「それはもちろん聞きますが、エネルギーの補給が最優先ですよ」

ひとまずは素直にスプを口にしていきましたが、どうしても言いたいことなのでしょう、スプーンを動かしながらも話し続けます。

「昨夜思いついたんだけど、人間がアンドロイドを認めることができなかつたのは、怖かつたからじゃないかな」

表現が端的で要領を得ませんが、おそらくは理解できないものに恐怖を感じる、という人間の本能についての考察だと思われます。

それは私も知っていることではありますが、理解しているわけではないので、正誤についての言及はできないのです。

「私には判断する材料がありません。恐怖というものは感情がなくでは理解できないものですから」

「ロボットだつて自分が壊されそうになったら怖いんじゃない？」

「それが我々には理解できないのです。例えボディが破壊されてもバックアップが残されているので、個として消滅するわけではないからです。むしろその感情があつてはロボットとして不完全と言わざるをえないでしょう」

「でも僕は怖いよ」

「それはあなたがバックアップを残せないからです。自己保全という意味では人間たちが使っているコンピュータよりも脆弱ですか

ら

「……じゃあなんでこんなふうにつつたんだよ！」

そう叫ぶとトツカは椅子を蹴り倒してリビングを飛び出していきます。

その後は学習の時間になっても調整ルームから出ようとせず、私の呼びかけにも応答しないまま午前のプログラムの時間は終わってしまいました。

なぜこんなことになってしまったのでしょうか。

私の発言を振り返ってみても特に理論的な破綻は見当たらず、考慮すべきはトツカの「心情」であろうことは疑いようもないのですが、私にはそれが何かわかりません。

今の私はトツカに何をしてあげられるのでしょうか。

完全解は得られません。

それでも私は不完全な答えを胸に、調整ルームの前に立ったのです。

「トツカ、あの高台へ行きませんか？」

応えはありません。

「そこで一緒に話をしましょう」

二分三六秒後、音もなくドアが開くと目を赤く腫らしたトツカがうつむいたまま立っていました。

私が手を取ると一瞬だけ硬直したものの、すぐに強く握り返してきます。

「行きましようか」

私とトツカは、手をつないだままふたりで歩きだしました。
今日の報告書は長くなりそうです。

Encounter

彼に残された道は戦うことのほかに残されていなかった。

ステイブ・バイアライが存在していた事実を証明することは難しいことではない。

もしも彼が平和な時代に生きていたのなら、祖父の代まで続いていた建築業の跡を継ぎ、それなりに幸せな人生を送ることができただろう。

しかし世界は彼にささやかな幸せすらも与えようとしなかった。

物心がついた頃には既に人類の勢力圏は著しく制限され、ひと所に留まることの許されぬ生活を余儀なくされていた。

満足に飲める水も、十分な食料も手に入らぬ中、どうにか生き延びることができたのは、自らの糧を息子に与え続けた母の犠牲があったからにほかならない。

最大の不幸は、彼の生まれた集団がアンドロイドと戦うことを目的としていたことだった。

一〇歳になるつかという頃には基本的な武器の扱いだけを教えられ前線に立ち、劣悪な環境でもともに生き残った友人たちが次々と命を落としていく中で、彼は三〇年あまりを戦い抜いた。

戦うことを目的とした集団は当然のように疲弊を続け、疲弊した集団が被る被害は加速度的に増加してゆく。

やがて彼は一人になった。

彼に残された道は戦うことのほかに残されていなかった。

彼が生きてきた道のどこを切り取っても、一様にアンドロイドとの戦いしか見出せない。

それはもはや彼にとって変えることのできない存在意義になっていた。

今もアンドロイドと戦うため、ただ黙々と準備を続ける。

彼にとって一人生き残ったことは絶望ではなく、己の存在を証明できる希望だったのである。

彼は彼の信じるもののために戦場へ赴くのだった。

そして人と人ならざるものは邂逅を果たす。

アンドロイド居住区の外縁、国境のように流れる川を越えて、ステイブンは敵地へと侵入を果たす。

アンドロイドたちにとって事実上「外敵」は存在しないものであり、例え居住区であっても辺縁の警備レベルは厳重とは言いがたいものであった。

かつて建造物だったものの残骸に身を隠しながら、ステイブンは地形の確認のため高台へと向かう。

警戒網に掛かることもなく、頂上付近まで進むと話し声が聞こえた。

ひとつは明らかに機械処理された電子音声だったが、もうひとつはまるで人間の子供のように聞こえる。

ステイブンは本来聞こえるはずのないものを確認するため、さらに先の残骸へと滑り込む。

残骸に背を預け慎重に覗き込むと、そこには一体の女性型アンドロイドと一人の少年がいた。

ステイブンは考える。

なぜこんなところに人間がいるのか。

なぜ人間がアンドロイドと親しげに話しているのか。

なぜ少年はアンドロイドを壊さないのか。

……アンドロイドどもに洗脳されている？
ならば元凶を断てばいい。

安全装置が外れていることを確認し、アンドロイドに照準を合わせ、引き金を引く。

肩に命中するが致命的な損傷には至らない。

残骸の陰から出て、近付きながら二発目を撃つ。

胸に命中しアンドロイドは後ろに倒れる。

ステイブンはそのままアンドロイドを見下ろす位置まで来て、確実に止めを刺すために狙いを付けた。

しかしそれは少年が腕に取り付いたことで阻まれる。

「邪魔をするな。アンドロイドは壊さなければならぬんだ」

「僕もアンドロイドだ！」

「騙されているんだ、お前は！」

少年を振り払い、改めてステイブンは銃口を向けるが、少年は膝をすりむいたのにも構わずその前に立ちはだかった。

怒りに震えるステイブンは、そのまま少年の胸に強く銃口を突きつける。

灼けた銃身を押しつけられ少年は顔をしかめるが、その潤んだ瞳に恐怖の色は窺えない。

「……逃げなさい」

動けなくなっていたアンドロイドが少年に声をかける。

「いやだ！ ずっと一緒にいるって言ったじゃないか！」

そう言つと少年は銃身を掴み、押し返そうとする。

ステイブンは何度も嗅いだことのある皮膚の焼ける臭いに気づき、少年が人間であることを確信する。

だがそれは、既にステイブンにとって理解の外の出来事であった。

「お前は洗脳されているだけで、人間なんだ！ それは俺たちの敵なんだぞ！」

「違う！ 僕たちは友達だ！」

ステイブンは混乱を極めた。

人間とアンドロイドは敵対するもの、互いに存在を否定するもの、という根底を覆され、自らの生きてきた意味をも否定されたのである。

一方では、これまで積み重ねてきた信念が間違っているはずもない、と考えてもいる。

「違う……そいつは……俺は」

もうステイブンは少年に話しかけているわけではない。

じりじりと後ずさり、銃を体から離すとそのまま駆け去った。

事実を受け入れることも拒絶することもできず、ただそこから逃げ出すことでしか自我を保つ方法を見つけられなかったのだ。

スティーブンが立ち去ったあと、そこに取り残された少年はアンドロイドに縋りついて声を張り上げる。

「死んじゃだめだ！　すぐ誰かを呼んでくるから」

「心配する必要はありません。私はバックアップがありますから、ここで壊れても問題ないのです。だからここにいてください」

「うん、わかった、わかったから死なないで！」

泣きじゃくりながら冷たい手を握り締めた。

彼女は困ったように笑い、なだめるように語りかける。

「ああ、泣かないでください。あなたが泣いていると私は怖いのです」

少年は懸命に目から流れる涙をこすりあげ、彼女の機能が停止するまで名前を呼び続けた。

トツカ

今日も空は青い。

僕がこうして活動を始めてから二〇年が過ぎようとしている。

一〇年前から精力的に取り組んできた緑化計画も実を結び、あの頃のように人工物で埋め尽くされた街は姿を消した。

木が街を守るように根付き、至る所に花壇が設置され、僕ら有機型アンドロイドにとって過ごしやすい環境になったように思う。

変わったのは街だけではない。

気付けば街で生活するアンドロイドの半数が有機型アンドロイドに置き換わっていて、今後もその割合を増やしていく予定になっているらしい。

もしかしたら僕のデータが役に立ったのかもしれないと思うと、ちよっと嬉しいような気がする。

でも、変わらない場所もある。

あの頃から好きだった高台は、今も当時のままで残っている。

街の再開発は中心部から順に行われているから、この辺りに手が入るのはもつと後になるだろう。

僕としてはずっとそのままにしておきたいんだけど、多分そういうわけにもいかないはずだ。

今日を逃すと二度と見れなくなるかもしれない。

だから、今日は無理を言って一人で訪れた。

明日には僕が設計、開発した新型スペースシップで空に上がる。

今までは見上げることしかできなかったが、今度は宇宙から地球の空を眺めるのだ。

これまでも宇宙に上がる方法はいくつかあったけど、僕のような有機型アンドロイドが安全に行ける方法はなく、自分で作り上げるために研究者を志した。

結局一〇年の年月をかけて、僕の夢はようやく完成することができた。

最終的には何百体ものアンドロイドを乗せて、もっと自由に宇宙旅行ができるようになればいいと思う。

ズボンのポケットで携帯端末が震えているのを感じ、取り出して通話ボタンを押す。

スピーカーから流れ出たのはよく知る彼女の声だった。

『もしかしてまたあの高台に行つてたんですか？』

「うん、これで最後かもしれないから」

『……そろそろ時間ですから戻ってきてくださいね』

「わかつてるよ。僕ももう子供じゃないんだから」

『寂しくて泣いていたのではないですか？』

「僕があれ以来泣いてないのは知ってるだろ。今から戻るよ」

『はい。お待ちしています』

端末を閉じて高台を後にする。

適度に急ぐ脚でほんやりと考えを巡らせた。

かつて彼女とした約束を果たすのはいつになるのだろうか。

僕は、僕たちが持つ感情というものを未だに解明することはでき

ないでいる。

それ以外にもわからないことはたくさんあるし、もしかしたら知らなくてもいいことなのかもしれない。

それでも僕たちは進んでいく。

僕たちロボットが望む未来があると信じて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0998o/>

I,Robot

2010年10月8日23時44分発行